

# 三重県林業研究所におけるスギ・ヒノキコンテナ苗の生産

三重県林業研究所では平成 27 年度よりコンテナ苗の生産試験を行っています。  
コンテナ苗を作られる方々の参考となるよう、育苗の方法を紹介します。

## 育苗環境

通常は野外にて育苗していますが、播種した種や稚苗が食害にあうことがあります。  
ガラス室等を用いると、食害等の危険が少なく、また、早期の発芽が見込めます。

灌水は季節によって調整しますが、  
1 日 1 ～ 2 回、各 15 ～ 30 分程度です、  
発芽後、本葉が展開する頃までは、  
遮光率 30% 程度の寒冷紗で覆います。



## 培地構成

主にココピート 70%、バーク堆肥 15%、パーライト 15%を  
混合して使用しています。配合割合を多少変えても大きな影響  
はありませんが、繊維質のココピートの割合を少なくすると、  
根鉢が崩れやすくなる恐れがあります。肥料は緩効性肥料  
(N16-P5-K10) 360 日タイプを 5g/L 混入しています。



## コンテナへの直接播種

種を市販の台所用洗剤 0.03% 水溶液に 6 時間程度浸し、  
沈んだものを各キャビティ 3 粒ずつ播種しています。  
現在のところ、ガラス室内で播種した場合、良好な  
発芽が確認されています。



表：平成 29 年 3 月に播種した種の発芽結果

樹種	コンテナ枚数	発芽した キャビティの割合	播種粒数に 対する発芽率
スギ	20	91%	59%
ヒノキ	21	86%	54%



## 1 年生コンテナ苗の生産

3月下旬にガラス室内で播種し、5月中旬から野外に移して育苗したところ、同年11月時点において、スギで標準規格5号を満たした個体は5割程度。さらに、夏期に追肥をしたものでは7割程度となりました。しかし、規格を満たした個体はサイズのばらつきが大きく、サイズが均一となるような育苗方法の検討が必要と考えられました。また、追肥したものはT/R率が高く、地上部に対する根の量が少なくなる傾向が見られました。一方ヒノキでは、追肥を行ったものでも規格を満たした苗はほとんどありませんでした。(標準規格5号：苗長30cm以上かつ根元径3.5mm以上)



各写真中 左：1年生苗（追肥あり）、中央：1年生苗（追肥なし）、右：2年生苗（比較対象）

## コンテナサイズによる違い

JFA150（40孔/枚）とJFA300（24孔/枚）を比較したところ、培地容量の多いJFA300の方が、苗長、根元径ともに早く大きくなることがわかりました。しかしながら、JFA300は1コンテナあたりの生産可能苗数が少ないほか、根鉢が大きいことで植栽手間がかさむ可能性があります。

